

臨床レポート

犬のメソセストイデス属条虫症の集団発生報告

西部美奈子¹⁾, 増田 絢²⁾, 松本 淳²⁾, 山崎真大³⁾

要 約

犬の繁殖施設において、血便を起こした3例と蛋白漏出性腸症を起こした1例に遭遇した。血便症状の犬の糞便からは多数の寄生虫の幼虫が検出され、形態的特徴の観察およびDNA解析により、*Mesocestoides vogae* と同定された。蛋白漏出性腸症を起こした症例は、糞便中には虫体は観察されず、内視鏡検査による生検で、病理組織学的に寄生虫の幼虫寄生が観察された。どちらの症例も、ブラジクアンテル 5mg/kgで駆虫し、良好な結果が得られた。

キーワード：犬, *Mesocestoides vogae*, 蛋白漏出性腸症, ブラジクアンテル

はじめに

メソセストイデス属条虫は、犬や猫等の肉食動物を終宿主とする寄生虫で、2つの中間宿主を必要とする。第1中間宿主は節足動物で、第2中間宿主は、爬虫類、両生類、小型哺乳類、鳥類である。犬は第2中間宿主を捕食することによって、感染する。成虫の腸内感染は通常無症状であるが、重度感染により、消化器症状を起こすことがある [1]。今回、犬の繁殖施設において、メソセストイデス属条虫感染により、血便を起こした3例と蛋白漏出性腸症を起こした1例に遭遇したのでその概要を報告する。

症 例

症例は、4～8歳のミニチュアダックスフントで、雄1頭、雌3頭であった。屋外にドックランを保有する繁殖施設で飼育されていた。症例1～3の3頭は、血便で来院した。3頭とも検便で、寄生虫の幼虫が多数確認された(図1)。虫体の同定は、日本大学の医動物研究室で行った。頭節に4つの吸盤があり、鉤を欠き、虫体組織内に石灰小体を有するという形態学的特徴とPCRによる遺伝子解析で12S rDNAの配列

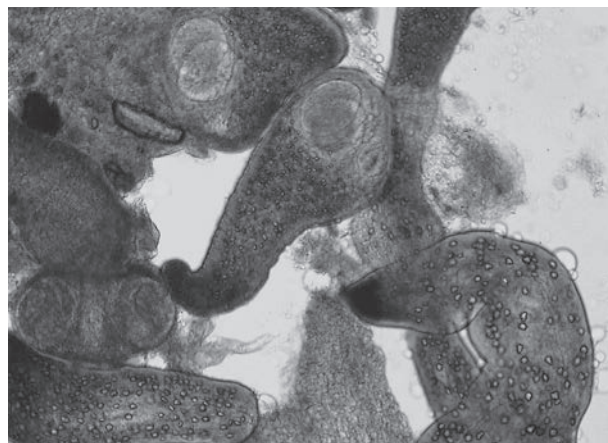


図1 糞便中の虫体(顕微鏡写真×100)

が99%、NAD1の配列が100%一致したことにより、*Mesocestoides vogae* と同定された。

症例4は、3日前からの嘔吐、軟便、食欲廃絶、後肢のふらつきで来院した。検便では、虫体は確認できなかった。血液検査では、軽度白血球の増加とCRPの中等度上昇、アルブミン2.3g/dlと低タンパク血症がみられた(表1)。超音波検査では、胃が拡張し、液体貯留しており、胃の運動機能低下が疑われた。十二

1) 岩手支会 すご動物病院 〒020-0173 滝沢市葉の木沢山497-15,

2) 日本大学生物資源科学部獣医学科・医動物学研究室, 3) 岩手大学農学部共同獣医学科・小動物病態内科学研究室
連絡責任者：西部美奈子 TEL：019-681-8100 E-mail：nbk09030@nifty.com

表 1. 血液検査成績

項 目	第 1 病日	項 目	第 1 病日
RBC ($10^4/\mu\text{l}$)	692	ALT (IU/l)	29
WBC ($/\mu\text{l}$)	17,000	ALP (U/l)	78
HGB (g/dl)	10.8	Na (mEq/L)	140
HCT (%)	36	K (mEq/L)	3.4
PLT ($10^4/\mu\text{l}$)	37.3	Cl (mEq/L)	97
Glu (mg/dl)	112	TP (g/dl)	5.5
BUN (mg/dl)	17.9	ALB (g/dl)	2.3
Cre (mg/dl)	0.3		

指腸の壁の厚さは 3.5mm で、層構造は維持されていたが、粘膜はびまん性に高エコー源性を示していた。

治療および経過

症例 1～3 は、プラジクアンテル 5mg/kg で駆虫した。単回投与で、便の状態は通常に戻り、虫体の排出もみられなくなった。

症例 4 は、第 1 病日から第 24 病日まで急性膵炎や炎症性腸疾患を疑い、皮下点滴の実施やプレドニゾロン 1～0.5mg/kg、メトクロプラミド、整腸剤の投与と低脂肪食を給餌した。食欲や消化器症状は改善したが、低アルブミン血症が持続したため、精査のために第 25 病日岩手大学動物病院で上部内視鏡検査を実施した。内視鏡検査では、胃の幽門粘膜と十二指腸粘膜の不整がみられた。病理組織学検査では、十二指腸に条虫の頭節と思われる構造物が多数存在し、粘膜固有層に軽度のリンパ球・形質細胞の浸潤がみられた（図 2, 3）。条虫寄生に伴う軽度リンパ球・形質細胞性胃炎・十二指腸炎と診断された。診断後、プラジクアンテル 5mg/kg 単回投与とプレドニゾロンの漸減により、低アルブミン血症は改善した。

考 察

今回の 4 症例は、屋外のドックランで第 2 中間宿主を捕食し、感染したと考えられる。*Mesocostoides vogae* の飼育犬での感染は、北海道と神奈川県で 2 症例報告されている [2, 3]。今回で 6 症例目になるが、野生動物では日本に広く分布している可能性がある。

Mesocostoides 属条虫は、通常は無症状といわれているが、今回の 4 症例は血便や蛋白漏出性腸症を起こした。以前の報告では、1 症例は蛋白漏出性腸症を起こし [2]、1 症例は腹腔内幼虫条虫症を起こしている [3]。*Mesocostoides vogae* の病原性はまだよくわからない点が多い。今後も症例の積み重ねが必要である。

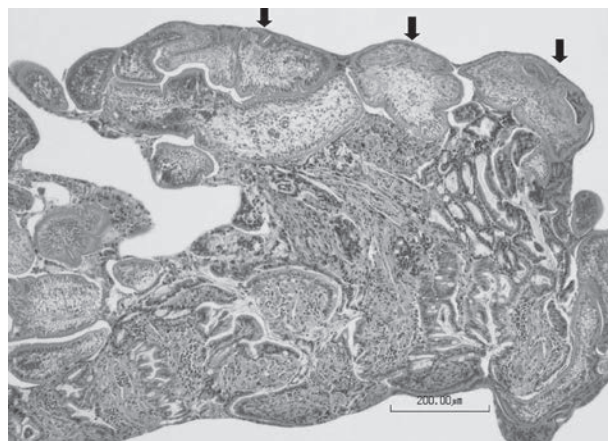


図 2 低倍像. 十二指腸粘膜絨毛に微小な寄生虫（矢印）が多数付着している。

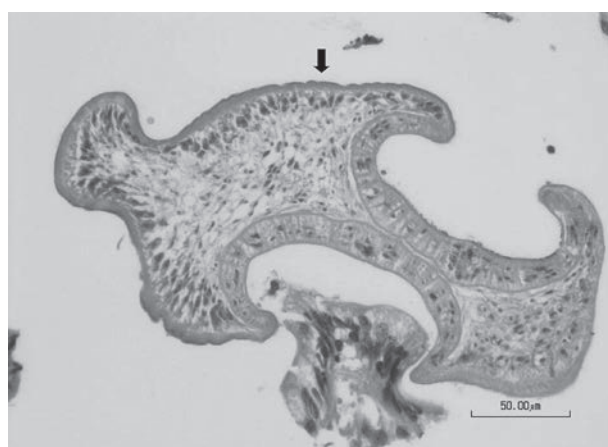


図 3 高倍像. 寄生虫（矢印）が絨毛先端に付着している。

今回蛋白漏出性腸症を起こした 1 例は、検便で虫体が観察されず、診断に時間がかかった。炎症性腸疾患では、寄生虫感染除外のために、プレドニゾロンで治療を開始する前に、駆虫薬を使用することは重要であると思われる。

引用文献

- [1] Frédéric Beugnet, et al.: 猫の寄生虫症とベクター媒介性疾患, 伊藤直之他, 38-39, メリアル・ジャパン (2016)
- [2] Yu Tamura, Hiroshi Ohta, Takuma Kashiide, et al.: Case report: Protein-losing enteropathy caused by *Mesocostoides voage* (syn. *M. corti*) in a dog, Veterinary Parasitology, 205, 412-415 (2014)
- [3] Takuya Kashiide, Jun Matsumoto, Toshiki Yamaya, et al.: Case report: First confirmed case of canine peritoneal larval cestoidiasis caused by *Mesocostoides voage* (syn. *M. corti*) in Japan, Veterinary Parasitology, 201, 154-157 (2014)